

序

本書は『レジデントノート』に「小児診療 なぜ？ なに？ 指南」と題して1年間連載された内容に加筆修正したものです。欲張りすぎて倍の分量になりました。目的は、小児特有の事例、診療のコツ、よくある疑問点の解決法を通して小児を診る面白さを伝えることです。

あなたが、どの専門科に進んでも子どもを診る場面は必ずやってきます。まずは小児への接しかたの基本(第1部)を理解して、あなたと子ども相互の間にある抵抗値を小さくしてください。実践すれば、よりスムーズに短時間に診療が進むことに驚くことでしょう。

第2部を読めば、救急外来の初期対応が自分でできるという自信が湧くでしょう。ここがスタート地点です。その「わかった気持ち」を「腑に落ちる」理解にするためには(救急)外来で指導を受けながら患児に直接触れてみてください。近くにいる小児科医をつかまえて相談したり、この人はメンター*に値すると思われる小児科医の外来を見学がてらにベシュライバー*してみたいかがでしょうか。

ステップアップのための第3部には、本来の小児科医としての役割を臨床に則した具体的な内容で取り上げました。研修医が単独でかかわることは難しいとしても、あなたの視野を確実に広くし、子どもの生活の場まで見通せるようになるために必要な知識です。ここまで理解できると、子どもそのものを診ることが楽しくなってきます。さらに余裕があれば第4部に書かれているTipsを臨床場面で使ってみてください。

小児科の守備範囲はどんどん広がっています。新生児医療と療育、園・学校医、発達障害、心身症、思春期医学、先天疾患の成人外来、新しいワクチンに遺伝相談などなど。本来全人的である小児科の医師はオールラウンダーなのです。また他科の医師にとっても、出ずる陽・蕾む花(新生児・小児)を知ることは、沈みゆく陽・落花(成人・老人)を理解することでもあります。

執筆していただいた小児科名医の皆様は心より感謝いたします。執筆者の多くが日本外来小児科学会の教育検討委員会が行っている「小児プライマリ・ケア実習」(<http://www.gairai-shounika.jp/>)の指導医です。実際にクリニックや病院に行って指導を受け、豪華な語りをつまみに遅い夕食をごちそうになってはいかがでしょうか。学生や研修医を心からの笑顔で受け入れてくれます。それが世話好きで話し好きな小児科医である証です。

最後に、遅筆な私を辛抱強く待ち、“しつこく”原稿の催促をしていただいた羊土社編集部に感謝いたします。

2010年7月吉日

森田 潤

*メンター：ホメロスの叙述詩「The Odyssey」に登場する人物Mentorに由来し、教わる者にとってよき理解者、よき支援者としての役割を果たすよき指導者

*ベシュライバー(独 Beschreiber, 英 Describer)：陪席しカルテ記載を行う人(口述筆記者)